



Title	留学生にとって「書道」は?
Author(s)	福光, 敬子
Citation	大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究. 2005, 3, p. 121-136
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6413
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

留学生にとって「書道」は？

福光 敬子

【要旨】

日本語や日本文化を学習する際、知識を得るという学習が多い中、身をもって体験し、自ら日本の文化を感じることができる書道は留学生にとって有益であると信じる。

本稿は、書道というものに対して殆ど経験、知識をもたない留学生を対象に、可能な限り多方面から日本の書道を紹介し、自ら作品制作させるまでの学習を行なった授業報告である。

まず導入として書道全般に関する講義と硬筆書写指導を行なう。留学生において日本語を正しく書く書写能力を養うことは必須の要件である。続いて毛筆による実技指導、そして最終には作品制作・プレゼンテイションをもって到達点とした。

筆を用いて書くことにより平がな・片かなの成立過程の理解が明確となり、更に印刷文字ではない手書き文字の美しさ、書き順の大切さなどを体験学習させる。

また古代中国における漢字の発生から書体の成立、変遷などを学習しつつ、自ら作品を制作することにより、漢字の魅力、表現の多様性、書道が文字や文学を素材とした芸術であるということなどの理解を促進した。更にお互いの作品を選別、評論することにより鑑賞力をも養われつつあることが確認できた。

はじめに

本センターにおける書道授業は「文字教育／漢字教育」の枠にある。2コマのうちの1コマは日本語レベルが中級を中心とし、その上下1級ずつ受講可能、つまり上級、初中級が受講できる。もう一コマは初中級中心としているので、中級、初中級、初級が受講できる。こうみるとかなり似通ってみえるが、実際の授業では前者は日本語・日本文化研修留学生プログラム（J）が多く、日本文化の予備知識も豊富で、伝えたい事柄はかなりの理解度で伝わる。一方、後者は研究留学生プログラム（R）、短期留学生プログラム（M）、Jプログラムの日本語初級生が殆どのため、講義よりも実作に時間を使った方が有益である。

「書道」の目標は以下の4点である。

- 1、筆を使って墨書することに慣れ親しむ。
- 2、日常の文字を正しく美しい形で書くことができるよう練習する。
- 3、書道史を通して書体成立の変遷を学び、文字に対する理解・関心を高める。
- 4、自らの書作品を創り、また鑑賞することを通して書道の芸術性を理解し、さらに、それを各自の言葉で話すことができるようになる。

以下、1. 授業の対象が留学生であることと日本人学生であることの違い 2. 授業の展開
3. 書道の周辺と今後の展望 と報告を進めたい。

1. 授業の対象が留学生であることと日本人学生であることの違い

1-① 留学生と日本人学生の「書道」に関する基礎知識、環境の違い

基礎知識の有無、多少は日本語学習期間の差によることが大きいであろうし、個人の知識関心による差もある。 「書道とは何でしょう？」の問い合わせに、中級クラスではかなりの回答が返ってくる。いわゆる文房四宝の筆、墨、硯などについても実際触れる事はなくともその存在を知り、名前などを答える生徒が多い。書道の筆の毛が何の動物の毛が多いとか、墨が何からどのようにして作られているとか、そういうことは日本人生徒も多くは知らない。こういう知識は、理解し記憶することは簡単なことである。

道具について

第四週目に確定登録が終り、いよいよ書道セットが貸し出され、墨をすり、筆で文字を書くことが始まる。その道具を手にとったとき、彼らに高揚感があふれていることをまずお伝えしたい。

はじめは初步的な注意をする。硯を置く位置、硯の向き、水をいれる分量、墨の握り方（銘柄の文字を読んで上むきに持つ）、硯のどこの部分で磨るか、どのくらいの力でどのくらいの時間磨らなければいけないか、衣服に着くととれない、など。このようなことは当然だろう、というのは日本人対象のことであって、留学生には、何度も繰り返して言わなければ、硯は海が手前に置かれ、時には左手側にある、水は溢れるほど入っていることも多々ある。しかし大きな問題ではない。道具に対する尊敬の念は、勿論個人差はあるが、概ね日本人より大きい。借り物であるにしても、丁寧に扱っている。

絵筆に比して、やわらかく穂先の長い筆は扱いにくく、墨の含ませ方も最初は要領を得ないが、みるみるうちに上達する。楷書の基本点画を終え、一ヶ月ほどもすると、留学生だから、という道具の使用に関する違いは、ほぼ解決すると言えるだろう。

姿勢について

日本人の場合、小中学校で書写を経験しているので、斜めに座って書く、半紙を斜めに置く、背中を丸めて書く、左手をぶらりと下に下ろして書く、ということはまず無い。留学生たちに見本を示し、背中、腰の落ち着け方、肩をおろし腕はあげる、脇は締め過ぎない、などの構え方を一応口で説明するが、なかなかその通りにはできない。実際にひとりひとり後ろから手をもち背筋を軽く押し、肩を下げさせ、肘を上げるよう正す必要がある。

なぜ、そのような正しい姿勢で書かなければならないかを説明する。「紙の中心を見極めることが作品作りの重要な点であるから、まっすぐに見下ろせる位置に目があるようにする。」「筆が倒れると線の太さがコントロールできなくなってしまうので、脇をあけること。しめすぎると筆が倒れてしまう。」また、「左側の脇もやや広げておいたほうが右側も自然にあきやすい。」「肩を上げると手が緊張し伸びやかな線が引けない」など。こういう注意は、ほぼ終盤まで続く。

手本に対する扱いについて

「手本を見なければいけない」という意識は日本人学生と留学生では大きく異なる。日本人は丁寧に見ない者でも「見なければいけない」という認識はある。左にあるものを、そっくりに右に書き写す、という行為は日本では小学1年生から繰り返して修練され、添削修正される。

「まねる」という行為が諸外国に比して、かなり丁寧に反芻されて子供は成長していくようである。

留学生にはそれが希薄である。もちろん練習の初段階においては線の始まりがどんな形になっているか、どこが太く、どこで力が抜かれているか、など筆法を見ようとし、また線の向き、長さ、交わり方、空間の取り方、などの線の構成を詳細に見ようとする。しかしそれは徐々に粗放になってゆき、手本はいつの間にかどこかへ消えていることが多い。そしてそれを指摘してもまったく罪悪感はないようだ。この傾向は、アジア以外の出身学生に顕著である。

一方、彼らは書かれたものを見るのではなく、指導者が書いているのを直接に見るということに関してはたいへん熱心である。またそこからかなりの情報を得ている。つまり細部にわたる綿密な平面のコピーではなく、立体でおかつ時間の経過とともにう作品制作に関心が強く、またその理解能力もすぐれていると言える。書いてみせる、あるいは一緒に書く、という行為により飛躍的な上達をみせるが、その後、形は原型からだんだん自分勝手な方へいってしまう。形に対する執着心が少ないのかもしれない。形ではなく、他のもの、たとえば、動きであるとか、気持ちであるとか、そういうものへ関心が多く寄せられているのかもしれない。

1-② 留学生と日本人学生の感覚の違い

授業で練成した課題をさらに宿題として、家で書き、自分で良くできたと思うもの5枚を持ってくるように指示を出す。5名ずつのグループに自分の書いたもの5枚のうちどれが一番いいか自分で選ぶよう指示する。さらに「どういうところがいいと思うか」「これは何故よくないか?」お互いに自由に意見を述べる。そして指導者も押し付けにならないように配慮しつつ、今後の彼らの鑑賞の参考になるような見方で意見を述べる。手本と同じだからよい、ここが違うからよくない、ではない。こうしていくと生徒がすばらしい鑑賞力をもっていることがわかる。書道を始めて3週目にしてすでに、多くの生徒が二点のうちすぐれている方を正しく選ぶことができる。そういう意味で、書作品に対する美的鑑賞力の日本人との違いはまったく無いといえる。むしろ、まねることに馴染んでしまっている日本人学生よりも純粹な鑑賞力が育っていく、とも言い得るであろう。

1-③ 留学生と日本人学生の「書道」講座に求めるものの違い

留学生は「書道」の授業に何を期待しているのだろうか。留学生たちのアンケートを紹介する。(2003.4月の第一回目の授業時)

書道の授業に何を期待していますか?

- ・きれいな文字が書けるようになりたいです。(USA J 男)
- ・帰国した後、自分で書道をすこしできるようになりたい。(UK J 男)
- ・筆の使い方、書道の道具の使い方を知りたい。字がきれいにかけるようになりたい。(ブラジル J 女)
- ・書道の歴史を勉強したい。墨と筆できれいに書けるようになりたい。いつもの字もあまりきれいではないので上手になりたい。(ハンガリー J 女)
- ・日本の美術としての「書道」について、もう少し詳しく知りたいと思っています。自分で筆を使って書いてみたいと思っています。(イタリア J 女)

- ・筆の基本の動きを知りたいです。色々なスタイルの違いがとてもおもしろいと思います。
(エストニア J 女)
- ・漢字をきれいな形で書きたいと思います。(エジプト MA 女)
- ・書道の正しい方法を習いたい。美しい芸術を楽しみたい。(マレーシア RE 女)

また、書道を受講した結果「こういうことがわかった」「こういうことが感じられた」と感想が述べられた。

2004.3月 作品発表会にて生徒が語った内容より（中級クラス）

- ・漢字のを感じました。特に「心」の部分。字は書いている人の感情を表します。嬉しいか、悲しいか。書いた時の心や気持ちが表れるということを体験しました。練習している時、字と私が一体になるのにびっくりしました。「志」と私は一体となり、それはすばらしい体験でした。作品は心とのお話しです。皆それぞれに人間として全く違う人格——それが書に出ると思います。(ベルギー JC 女)
- ・書いているとやる気がでてきます。気持ちがよくなります。書道をすると、集中力が高まって、とても落ち着くので大好きです。(ミャンマー JL 女)
- ・きれいな漢字が書けるようにと、この授業をとりましたが、作品で自己を表わすことができるというのは発見でした。雪舟などが書いた水墨画や山水画が好きなので、実際に筆をとってみて、どういう気持ちがわかつてきました。春学期も書道を取ります。帰国してからも書道を続けたいと思います。(オランダ JC 男)
- ・行書が好きです。行書はかたくなくて、見ているといい気持ちになります。書道が大好きなのは、私の気持ちを落ち着かせてくれるからです。私は合気道をしますが、静かに集中しなければいけないところが、書道は合気道や武道と同じだと思いました。(フランス JP 女)
- ・難しいのは書くときの力の入れ具合です。それぞれの文字のバランスをとるのも難しいです。バランスはとても大切だと思います。簡単な線から、長い言葉まで練習しましたが、それぞれの線が大切だから、線を丁寧に書いたらいい作品ができると思います。(タイ MA 女)
- ・言葉の内容で、『我が道程』を書くことに決めました。自分の道は自分で決めたいと思っていますから。濃い墨で力強く書きたい、と思いました。一本の筆で、太い線、細い線、いろいろな線が書ける、これは鉛筆ではできません。(タイ MA 男)
- ・書くのは難しい。筆を強く押して、書くと興奮した感じみたいです。書道には集中が必要です。書いてみて本当だとわかりました。それに集中力だけではなく、うまくできるかどうかは、そのときの気分も関係します。機嫌がわるければ、どうにもうまく書けません。他のことでいらいらしていると、あまりうまく書けません。書道専門というのは、博士課程までありますか？そこではどんなことを研究するのですか。(タイ MA 男)
- ・ひらがなに関心があるので、ひらがなの作品を書きたいと思いました。ひらがなを書くことは簡単なようで実はとても難しい。書道には以前から関心を持っていましたが、機会がありませんでした。書道を体験してみて大切なことを三つにまとめました。①力・方向の調節②心の集中③基本を守ること。もっともっと書道についての勉強をしたいと

思っています。タイの中華街で筆、墨などを買って練習を続けるつもりです。(タイ Z1 男)

- ・書道は日本の伝統的な文化で、必要不可欠なものだということだけを知っていましたが、実際に書いて、はじめてその素晴らしさがわかりました。気持ちが不安な時、筆で字を書くと安心してきます。筆のやわらかい動きと同様に心もやわらかくなる気がしました。これからも趣味として書道をもっと勉強したいと思います。(モンゴル JP 女)

- ・『雲に眠る』と書きましたが、やわらかい感じに仕上げたかったので、薄い墨にしました。私のイメージした意味はふわーっとした白い雲の中で遊んで、疲れて眠ってしまう、という意味でした。先生の説明の意味とは違いましたが、もともとこの言葉が気に入つたので書くことにしました。墨の色だけでなく、仮巻の色によってもずいぶん違った感じになるんだな、ということがカロリンさんの二つの作品を見て、解りました。言葉の意味と、どう書きたいか、というイメージにのみ集中して書きました。他のことを何も考えないので、心がリラックスできます。(ウクライナ JP 女)

- ・手の力を抜いて書く、ということが解りました。宿題を書いていてわかったのですが、落ち着くことが大切です。落ち着かないときれいに書けません。ですから時間がかかります。体中の力を作品に使います。けれど、書き終わると、体を休ませた気がしました。書道の授業を受けてから、日常生活や町の看板などの書を注目するようになりました。(モンゴル JP 女)

- ・文字がうまく書けると、気分がよくなりました。書道は美しく、伝統的な芸術なので、この伝統を尊敬するために、正しく文字を書くべきだと思います。書道について何も知らなかつたので、授業で、漢字の発展、筆の使い方の練習、いろいろな筆の運び方、書き方、とてもおもしろかったです。日本の書道の歴史についてもっと知りたいと思います。特に現代の日本において、書道がどういうふうに重要か、ということをもっと勉強したい。また、芸術作品としての書道の筆の運びに興味を持っています。東京博物館で書道の作品を見ました。この授業を受けていたので、興味深く観ることができました。(オーストラリア JP 女)

以上が、2003年度秋学期最終授業で述べられた感想である。前もって作品発表会をすることを伝えていたが、授業ではいっさい触れていない精神面のことが多く語られている。彼らの半年前の「書道」によせていた関心が、たいへん具体的なものになっていることがわかる。心と体が同じだということを言った学生もいる。自分の心への問いかけ、自分の気持ちの観察などを述べた学生が多いのは予想外であった。

そして、初中級対象の授業の感想は、以下のようなである。

- ・書道は面白いでした。瞑想に似ています。心と体がひとつになっている気がしました。「旅立ち」を書いた私の心と、「旅立ち」の文字は一つになっています。趣味として続けたいと思います。(南アフリカ共和国 RE 女)
- ・今回の作業で難しいところは、落ち着くことでした。落ち着かないとうまくいかないことは解りましたが、なかなか初めはうまくできませんでした。時間が必要でした。書道

- に、様式がたくさんあることを知りました。それがきれいな点をもっています。これからも書道を続けようと思っています。(ブラジル UE2 女)
- ・絵が好きで、日本へ来る前、浮世絵のことは知っていましたが、書道については何もしりませんでした。カタカナを筆で習ったのはいいことです。(フランス MU 女)
- ・来日前に、日本語の先生が書かれた書を見たことがあって、書道の授業をとりたいと思っていました。左利きで、すこし問題がありましたが、大きい筆で漢字も、小さい筆でひらがなも書きました。(UK MU 男)
- ・初めは私はこのクラスにふさわしくないと思いましたが、だんだん興味を持つようになりました。授業が終わってしまうことを残念に思います。(エジプト RE 男)
- ・書道は文字を書きますが、筆を使うので絵を描くように感情を表すような気がします。日常生活でポスターや年賀状などを見かけるたびに、うつとりして、普通の文字よりも印象に残ります。短い表現だけれども、深い意味を持っているので、書道というのはかっこいい。筆で書くには、ペンや鉛筆とちがって集中することが必要です。気持ちが落ち着かないとバランスが取れず、きれいな字になりません。漢字が絵から出来たこと、行書をはじめさまざまな形があること、などいろいろ解りました。書き方だけでなく、文字の一つ一つの意味も勉強しました。(タイ J 女)
- ・難しかったのは、線と、書き方、です。それぞれの作品は自分のスタイルを表しています。書体に、それぞれ特徴があって、面白いと思います。もっといろいろな書体で書いてみたいと思います。授業は終わっても練習を続けたいと思っています。(タイ MM2 女)
- ・書道を実際にするのは今回が初めてでした。タイで書道を最初に見たのはマンガでした。その時、日本の学生たちが書道の授業を受けなければいけないことを知り、とてもびっくりしました。単に字を書くだけなのに授業は必要ないだろうと思いました。授業を受けてみると、思ったよりずっと難しいということがわかるようになりました。筆を使うことは大変ですが、文字それ自体がもつ意味や、毛筆の多様性など、書道は面白い芸術だと思うようになりました。(タイ UE2 男)

以上、初中級を中心としたクラスであったが、この学期は中級のクラスとあまり違いがなく、熱心で理解力もあった。たいへん有益な感想発表であった。

また、

2004.7月の 作品発表会時に受講生が提出した文章より

興味があること

- ・①文字(漢字・かな)の成り立つ過程。②題材にする日本語の語句の意味。③書道と精神の関係(インド RA 女)
- ・日本の伝統的な美術に興味があります。特に現代の美術に昔のものを取り入れる取り入れ方に興味があります。現在書道は美術として書かれていますが、将来どのように変わるか知りたい。(オーストラリア JP 女)
- ・漢字が好きだから、書き方を習うのはおもしろくて、さらに作品を見るのも気持ちがよい。(フランス JP 女)

- ・書道は精神状態と大きく関わっていることに興味があります。心の状態によってうまく書けなかったりすることもありますが、ほとんどの場合、書道をして心が安らぐので大好きです。(ミャンマー JL 女)
- ・いつか漢字は無くなってしまう日本人は漢字を使わなくなるか、またはその理由について考えたいと思う。(ハンガリー JC 女)
- ・芸術としての書道に興味があります。つまりヨーロッパでは書いたものが芸術だとされることが珍しいから、芸術としての書道が非常におもしろいと思います。(オランダ JC 男)
- ・日本的小学校、中学校、高校における書道教育に興味があります。(ロシア JC 女、モンゴル JP 女)
- ・文字の筆順に興味があります。(フランス JP 女)
- ・漢字の起源がおもしろい。(ペルー MM 男)
- ・書道は日本の美術を代表するような特徴があると思う。機会があればもっと習ってみたい。漢字の意味が解ると書道作品をもっと深く感動することができます。でも意味が解らなくても、それぞれの書体を見るだけで楽しむことが出来ます。(タイ MM 男)
- ・漢字の書体に興味があります。絵のような最初の篆書から抽象的な草書までよくみると漢字の書き方の変化がわかります。まだ書いたことのない草書もむずかしそうですが、書いてみたいです。(タイ MA 女)
- ・むかし、女の人が漢字からひらがなを作ったことは面白いと思った。女の人が漢字を使わなかったのはなぜか。(USA MM 女)
- ・むかしの漢字や、ひらがなカタカナの基になった漢字に興味があります。(ドイツ RE 男)

以上のような感想により、授業前にとった「書道の授業に何を期待するか」という問いかけには漠然とした答えばかりであったが、半年の授業体験の後、どういう点に関心をよせたか、更にどこを知りたいか、したいかなど具体的になってきた。

知識としては、1 芸術としての書道 2 書道教育の現状 3 漢字の書体の成立過程 4 漢字の起源などが上げられ、実作としては、今回できなかつた他の書体や気に入った書体を更に書いてみたい、ということであった。

比して、日本人学生の場合は書道の授業に何を求めているか。同年齢の学生の場合、大学で書道を選択するのは、高等学校書道科の免許取得、中学校国語科の免許取得がそのほとんどで必修意識が高い。また一般教養として書道を受講する場合は、1の「芸術としての書道」を期待はするが、それは知識としてではなく実作としてであろう。書道の専門コースの学生はすでに上級者であるから比較にはならない。

日本の高等学校での藝術科書道の授業の場合、1, 3, 4に触れつつ、主目的は

- 1、書写能力を高める。
- 2、創造的な、個性豊かな表現力を育てる。
- 3、鑑賞力を高める。
- 4、書を愛好する心を養う。

5、書の理論や歴史を理解させる。

6、書の文化と伝統を尊重する態度を養う。

などがあげられている。留学生の場合、授業後に1, 3, 4, 6は充分に達成できていると確信する。2, 5はいかがであろうか。「創造的、個性豊かな表現力を育てる」「書の理論を理解させる」——これは難問である。

書道体験により発見したこと

- ・テクニックと知識と心と手の関係を発見しました。(アラブ首長国連邦 RM 女)
- ・楽しんでやるとかなりできると思います。もちろんテクニックと知識は必要ですが、無感情的にやればあまりできない感じがする。(インド RA 女)
- ・草書の書き方が他の書体にくらべて、自由で一瞬で書くから面白かった。大好きです。(フランス JP 女)
- ・書道を実際にみて、書道の難しさと、すばらしさを肌で感じました。心の状態によって作品のできが違うのは本当に不思議です。(ミャンマー JL 女)
- ・書道をした時にどんなに悲しいことがあってもそれを忘れて気持ちが落ち着いた。書道はとても楽しかった。(ハンガリー JC 女)
- ・書道は難しいです。そんなに難しいとは思いませんでした。集中力がないとできないのです。(インド JC 女)
- ・書道のおかげで漢字が覚えやすくなりました。(オランダ JC 男)
- ・書道をする前は非常に難しくて私にはできないものと思っていた。しかしやってみたらそんなに難しくなかった。(ロシア JC 女)
- ・隸書をやってみて、それまでの書体と筆の動きが違うことを知りました。
- ・書道のテクニックは絵を描くのと似ている。絵のように評価する。(ペルー MM 男)
- ・墨をたっぷり使うところと、少しだけ使うところのバランスをとれたらいい作品になることを知った。(タイ MM 男)
- ・書道で練習した漢字はよく覚えられることがわかりました。その漢字の意味もふかく理解できます。筆の運びで線を太くしたり細くしたりするのが難しかったです。(ドミニカ共和国 RE 女)
- ・漢字を覚えるのが楽しくなりました。書き方に正しい方法があることを知りました。(フィリピン MM 女)
- ・書道をして昔の人のように書いたから、昔の人になるみたいな感じがする。書道で何かを書いた後、自分の話がよくなつたので、びっくりした。(USA MM 女)
- ・書道をするとき、心を静かにすることが大切です。筆で書くのは本当に下手です、と発見しました。しかし、きれいな漢字を書いたとき、気持ちがいいですから楽しいです。(ドイツ RE 男)

具体的に、日本人学生と留学生と、書道授業に求めるものの差を、ここで明言することはできないが、時間をかけて整理する必要はある。

1-④ 実作面の違い

書道授業における実作面において、留学生と日本人学生とどういう違いがあるか。

- ・あまり手本に頼ろうとしないという一面があることは前述したが、これも個人差があるので一概には言えない。しかし、自分の言葉を書きたい、自分で好きなように書いてはいけないか、などと尋ねてくるのは日本人対象の授業では皆無である。それほど書道とは模倣を基盤としていることが定着してしまっている。反して留学生は、書道は一藝術だ、という意識が強いからか、マネばかりするのはおかしい、自分らしさを出したい、という欲求を持つ者が少なからずいる。もとより筆を持って一ヶ月の生徒が手本なしですばらしい作品が書けるはずもない。しかし、手本の模倣を押し付けるのではなく、なぜ模倣をすることが必要なのか、模倣することによって何を得るのか、という目的を明示する必要がある。
- ・今まででは知識として、床の間の掛け物である書、お寺に掛けられた額の書、水墨画に添えられた贊の文字、などすべて鑑賞の対象でしかなかったものが、自らの手により生み出されるという感動は大きいようだ。この感動は、幼い頃より毛筆に親しんでいる日本人学生とは比較にならないほど大きい。
- ・一本の線を納得いくように書くときに、いかに集中力が必要か、また色紙に清書するとき今まで経験したことのない緊張感を覚え、集中力を必要とした。その体験を「ひとつひとつ今までにない脳の一部を使うようだ」と言った生徒がいた。こういうことは、机上の知識では計り知れないものであろう。体験を通して、日本の「道」の特徴の一つを知り得たかもしれない。日本人学生で、「今までに無い緊張感と、集中力」といった表現を述べる学生はいない。こういうものだということを幼い体験からすでに知っているから当然である。
- ・題材を選ぶ際、決め手となるのは書かれる語句の内容なのか、書風なのか、その書の難易度なのか、ということについては充分な数の調査をしなければ日本人学生と留学生の差は明示できないが、あまり違いがないように思う。複雑な漢字を難しそうだ、と敬遠するのは同じだ。しかし、留学生に草書、隸書、篆書に対しての敬遠は見られない。

2. 授業の展開 2003春学期、秋学期、2004春学期の場合

2-① 最初3回の講座

最初の3回の授業は、確定登録以前であるため、書道道具を受講生に貸し出すことができない。そのために毛筆道具なしの講義と実演にとどまらざるを得ない。この3回を有意義に、単調な知識の押し付けにならないように努めた。

「書道とは何か」日本における書道の扱われ方、つまり教育面、芸術面、社会生活面、についての書道のあり方についていろいろな方面から説明する。また、文房四宝についても筆などは多種サンプルを用意して見せた。

また、学生のひらがな・カタカナがどの程度正しく、美しく書くことができるのかをチェックする。20名の机間を巡視したのでは、書き順やハネル、トメル、ハラウなどのこまかいチェック

ックができない。そこで2つのグループに分け、それぞれのグループから順番に一人ずつ出て、黒板に平仮名で言葉を書いてゆく。書き終わるごとにその書かれた文字について、添削をする。ここで書き順、続け方(な・そ・き・さ・ふ)の許容、形の美醜などを細かく説明する。ひらがなの元の漢字を知り、その変化を認識することにより、ひらがなの美しい形を知ることができ、離れていても続いているよい許容範囲を理解することができる。この時、指導者が半紙に毛筆にて大きく書いてみせると更に理解度が高くなる。

トメル・ハネル・ハラウの違いも、意識しなければそのほとんど学生は、終筆の部分をサッとぬいて終わろうとする。母国の文字において最後を止めて押さえる、という経験が少ないからであろう。「シ」と「ツ」の混同は、「シ」の2画目まで書き「ツ」の3画目を書く、という、またその逆もあり、かなり多くの学生が混乱している。

ひらがな・カタカナともにその字源を教えることにより、書き順の混乱や、形の正確さが是正される。たとえば、アルファベットに慣れた生徒は、「十」をまるで小文字のtのように縦を先に、そして軽く払うように横画を書く、また「な」の右上の点が最後であったりする。こういうことも字源を繰り返し伝えることで矯正され、また書き順が大切であることも認識するようになる。

宿題は毎回、かなりの分量を出した。ひたすら数多く書かせるのではなく注意点を自らが意識することのできる内容を復習させる。この宿題は平仮名・片仮名をマスの中に注意深く硬筆で書くものであるが、参考手本は筆文字とした。筆文字ではトメル・ハネル・ハラウ・ヌケがはっきり解るからだ。提出された文字は感動するほど美しかった。

2-② 毛筆授業に入る

さて、いよいよ受講生が確定し、書道道具一式を貸与する。大切に扱うこと約束させる。消耗品である大筆・小筆・半紙は教室にて頒布した。最近は100円ショップにて表面だけ石のプラスティック硯や、筆や半紙や文鎮まで売っているようだが、妥協できる程度の半紙を頒布する。墨は90分の授業で書く枚数ならば十分磨れる量なので、市販の墨汁は認めない。

最初の毛筆授業は、道具の説明、使い方、後始末の仕方、家で書く場合の注意、など実際の注意事項が多く、小筆を使用するに留める。楷書の基本点画の練習(一・|・ノ・\)をし、それを組み合わせることによって、カタカナを書くことができるので、名前を手本どおりに書く、という練習をする。ここで小筆の筆先のおろし方について、かなり丁寧に説明しなければならない。いくら安価であるとはいえ小筆を根元まですっかりくずしてしまうと、元どおりにはならない。また使用後の水を少しつけてふき取る丁寧な扱い方も十分説明すべきである。

その後、大筆にうつり、点画、そして簡単な文字(木・一・二・三・・)に移り、家で更に進めたい学生のために手本を過分に渡した。中には宿題以上に書き進める学生もいた。

漢字の楷書は、点画の基礎をすることによって、あとはその筆法の組み合わせと、形のデッサンであるから、みようみまねで進めることができる。

限られた時間内では、次に「かな」に進めるのが適当であろうと考える。小筆にて「いろは歌」を半紙2枚に書く。半紙一枚を4行6段のマス目に折り、ひとマスごとに「いろはにはへとちりぬるを・・」を手本に従い書く。この「いろは歌」は今や書道の稽古にしか残っていない

いかもしれないが、たいへん興味をひいたようである。

小中学生用書写のひらがなのスタイルを書いたのち、平安時代の名品から集字したひらがなの手本を渡し、書かせてみると、彼らの書くその美しさに、指導者も感嘆の声を上げたほどである。

「いろは歌」は仮名48文字を重複なく一度ずつ使用して、「わかよたれそ」の破調があるとはいえた七五調の歌となっており、古くから手習い歌として親しまれてきたこと、「色は匂へど散りぬるを・・」と古典かな使い関しても少し触れた。

平安時代に「女手」として生まれた「仮名」には一音を表すのにいくつもの文字があった。明治33年、平易でかつ他と混同しないものひとつを選び「ひらがな」と定めた。こうしたひらがなの説明をする上で、漢字の原字から草書化していく段階を黒板に書いて見せる。

ここで注意しなければいけないのは、中国における漢字の書体の変遷と、混同してしまう危険をはらんでいることである。中国においては、古代に篆書が用いられ、漢代には隸書、その後楷書が誕生する。そして楷書から行書、行書から草書、という順に書体が生まれたかに考えられがちであるが、実はそうではない。篆書から隸書、隸書から楷書、と時代とともに書体が変遷するが、そのときどきにおいて、簡略化されたもの、日常に遭われたもの、これが行書であり、草書（あるいは草書のもとになったもの）である。したがって楷書から行書、行書から草書、と一つのルートに並べてしまうのは危険である。

しかし、日本の仮名成立を説明するとき、どうしても「安」の文字の楷書をあげ、それをややくずしてだんだん「あ」に近づけてゆくため、すべての行書は楷書から生まれた、と誤解を生みやすい。これはとりたてて丁寧に説明しなければならない。

2-③ 色紙作品制作をめざす

芸術としての書を体感させるために、作品を仕上げることにする。その前に、「手本」というものについて私見を述べておかなければならない。

- ・書道には手本が必須という考えは正しいであろう。手本とはあるとき、師匠や先生の肉筆のものであり、2000年も前の石に刻された文字の拓本であったりする。
- ・書道が、字体の変遷をもつ文字を題材としている限り、古典の名品や伝承されてきたものを学ぶことを避けて通れない。
- ・書道に初心者である留学生にどのような手本をわたすか。一般に初心者には、線の質への意識を高めるために、肉筆の手本をわたすことが多いのであるが、これは一長一短である。「いろいろな線があってよい」ことを感じてもらいたいのに、線の質がどの人の書いたものもたいへん似通ったものになってしまうからである。
- ・そこで高等学校1年2年用の「書道」の教科書数種から、字句の意味、筆法の難易度、仕上げの体裁などを考慮して、20種ほどの手本をコピーを使って作成した。行書『蘭亭序』より「古今」、楷書『九成宮醴泉銘』より「天風」「清如玉」、隸書『曹全碑』より「平安」「大志」、良寛和尚の「天地」・・・現代著名書家による「雄飛」「我思古人」「道程」「向上心」「進」「花吹雪」・・・かなで一茶の俳句などである。
- ・そのそれぞれの手本には、どの書体であるか（篆書・隸書・楷書・行書・草書・かな）、

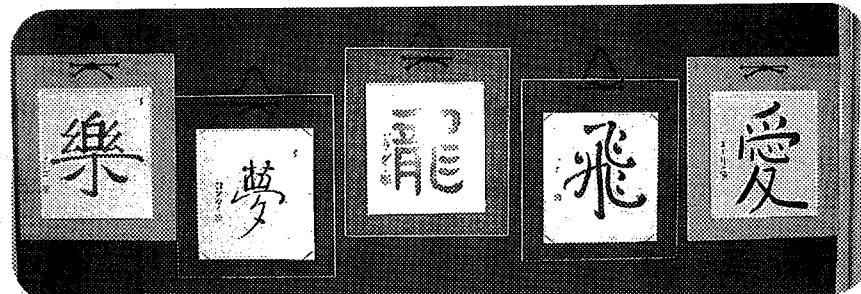
読み方、意味、書き順、筆遣いの注意点、など細かに添え書きした。

- これらの手本を黒板に書体別にマグネットで貼り、書体についての歴史的な解説、筆法の特徴の説明を行い、併せて難易度も伝える。それぞれのクラスに20名余りの学生がいたので、約20種類を3部づつコピーし、一人2種類ずつ選ばせた。
- つまりこの授業で使用した手本は、肉筆ではない。書いて欲しいという生徒には、その教科書から抜粋した手本を指導者が臨書してみせ、手渡した。

《実際に色紙作品制作に入る》

- 各自が選んだ課題の半紙練習が始まる。2種に決められず、数種類を書いてみたい、という学生もいた。机間をまわる指導は、今使用の教室の場合あまりスムーズでなく、生徒に前へ持ってこさせ書いてみせながら指導するのが能率的である。筆を持ち始めて6週目には、色紙作品として仕上げることを目標にする。
- 色紙は良質の画仙紙を貼ったものを用意し一人2枚ずつ購入する。このころには墨すりもかなり慣れてきており、どの程度の濃さがよいかも体得できつつある。
- 落款も入れ押印もする。この際、押印の価値を説明し篆刻が書道の一部門であることなどにも触れる。これは色紙を書き始める前に説明しておく。時間があれば篆刻のまねごとも授業に取り入れたいところだが、とにかく欲張ることが許されない。私有の遊印（姓名印や雅号印ではなく、風流なことばや成語が刻されている書画のための印）を3種類用意して中国の印泥（日本の印肉とは異なる）を練り、つけ方、押し方、押す位置を説明し、自分の作品には自分で押すことを原則とした。目を離すと扱いを間違えたり扱いが粗野であったりするが、この押印による作品効果というものは是非体感してもらいたいものの一つであった。
- 色紙は2枚以上は書かない。押印が済んだものを作ると一緒に見、どちらが良いか意見を聞く。その後、指導者として一点選びその選んだ理由を述べる。作品はセンター内に10点ずつ展覧する。

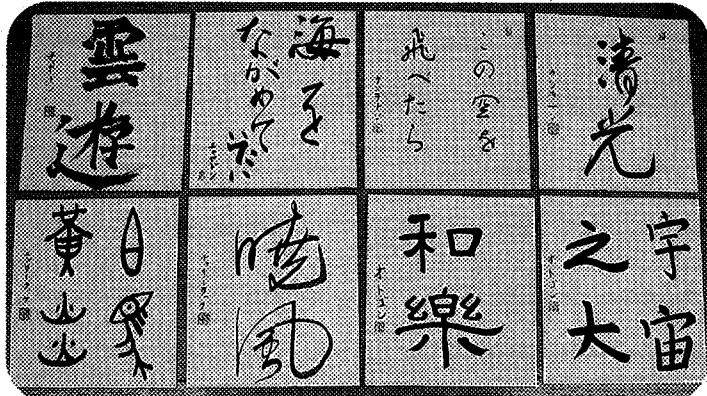
2003秋学期
書道を始めて2ヶ月の
留学生による作品



2004春学期
書道を始めて2ヶ月の
留学生による作品



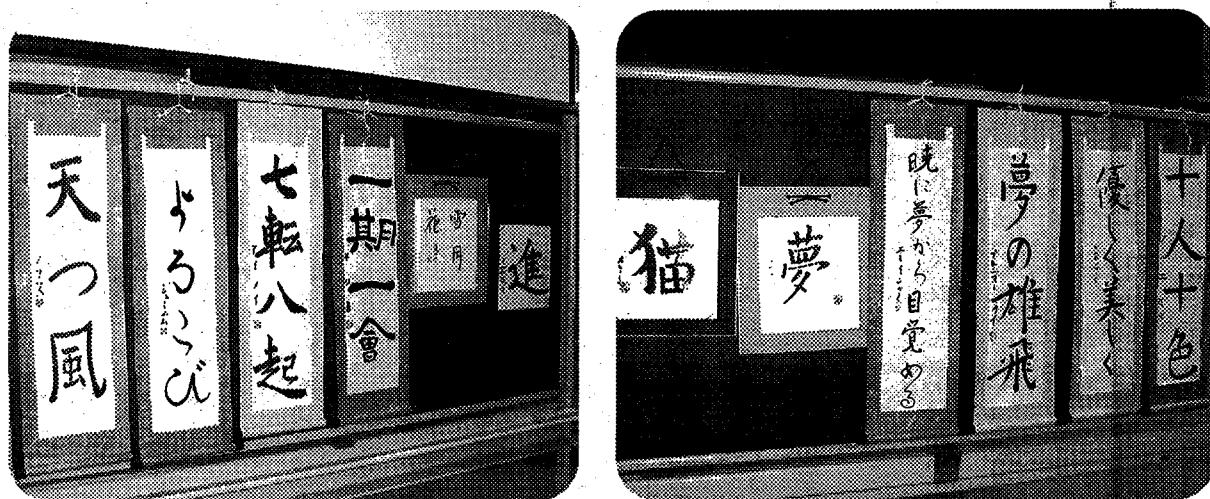
2004春学期
秋学期から続けて
受講した留学生作品
(書道歴8ヶ月)



2-④ 小条幅作品制作

作品を創るということが楽しく感じられるようになってきた学生に、次には小画箋紙（幅16cm長さ67cm）を用意した。それは、この形態が、「掛軸」の小型であり、簡易な仮巻に貼り付けることによって、一応の体裁が整い、日本伝統の雰囲気を味わうことができるからである。価格も一本200円ほどで入手できる。留学生に個人的な費用がかかる場合、彼らがどの程度まで負担できるのか確かめながら常に高額な費用をかけなくても効果があがる方法を考えなければならない。

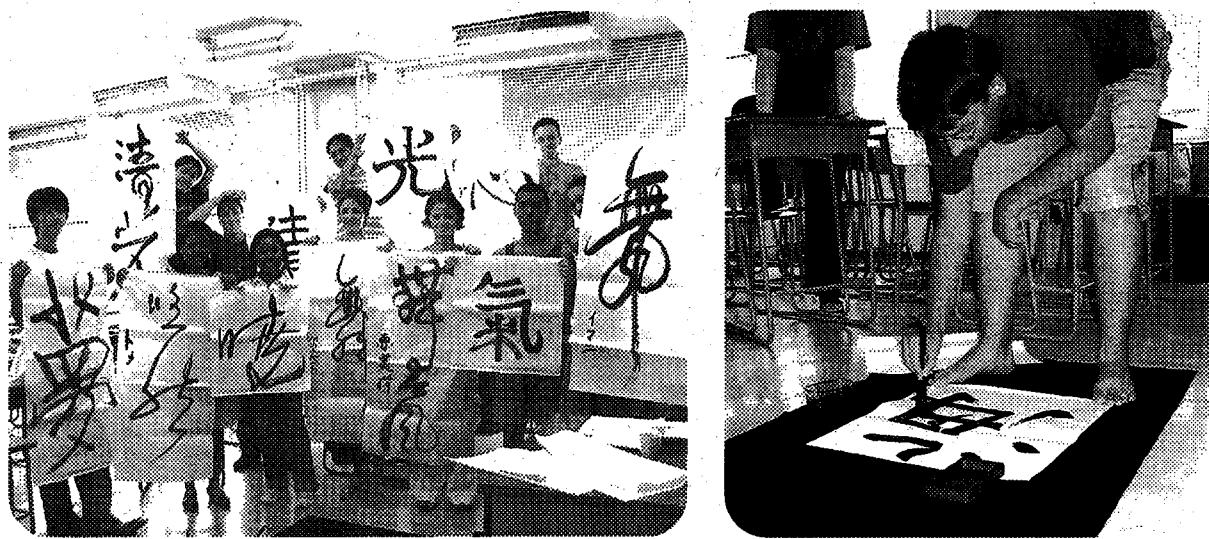
- ・この小画箋作品の手本は、漢字三～四字の字句のほか、大きく二文字、また漢字かな混じりの現代のことば、など多様にわたり用意した。作品にした時の字面がよく、かつ内容のあまり複雑でないものを50種ほど手書きした。これらは古典名品からのコピーという訳にはいかず、指導者の肉筆手本となるが、その際、書風が偏らないように楷書の中にも欧陽詢風、虞世南風、北魏風、また行書も王羲之風、米黻風、というように表現の多様さをこころがけた。また隸書は作品効果がねらいやすいので、かなり数を多く用意した。
- ・墨の色、スピードによる線質の変化、潤渴による立体感、中心の通し方、落款の意義、文字群のバランス感覚、など実作にまつわるいろいろな見方、表現の仕方を話した。
- ・掛軸の表具方法、掛軸の扱い方、表装の名称（天地、一文字、風帯、中廻し、軸先など）話をと、たいへん興味を示し、時間さえあれば簡単な裏打ち作業を見せることができるように、と残念であった。
- ・篆刻に関心のある学生もいて、いろいろな質問が出た。



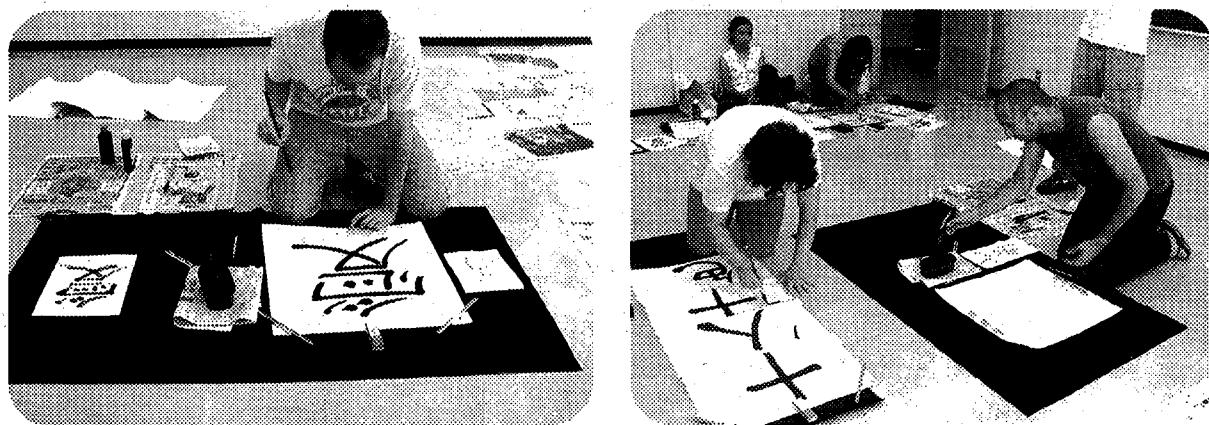
2003.春学期 終盤の留学生作品



小画箋紙の作品練習に4週間をかけて、そのつど今日の予定、来週の予定、今後の予定、と黒板に明記し、納得いく作品を仕上げることを内面から鼓舞するように心がけた。そして最終授業において作品とともに発表をする、という案を掲げた。これが結果的には大きな成果を上げることになった。発表の2週間前から発表内容を日本語でまとめるようにプリントを配布し、その内容にもヒントを与えた。題材の説明、どう読むか、どういう意味か、なぜその手本を選んだか、に始まり、他の級友たちの作品についての相互批評、そして「書道」の授業で何を学んだか、「書道」をどう思うか、などについて彼らは貴重なその体験を語ってくれた。そしてそれらはすべてヴィデオに収められている。



2004春学期の最後に



2003春学期の最後に

3. 書道の周辺と今後への展望

書道作品に書かれた内容について、ときには漢文について説明せねばならず、和歌について語らねばならない。書体の一つである篆書を説明するには、甲骨文字、金文を紹介し、文字学にも触れなければならない。書の芸術性を語るには、数々の古典から得た普遍性のある法則に触れ、なにゆえにどこがすばらしいかを説明することもある。規範とする古典作品を語るには、日本や中国の歴史や文化に触れ、書道史上の位置づけを語り、それをどう理解し鑑賞すればよいのか、問われれば返答する。教育における書道を語るには、学校の書写・書道教育の現状や、大学の書道専門コースの内容に触れることがある。また掛軸や巻物の表具や、それらの取り扱いについての基礎知識を話す必要もある。

2004年夏より、CJL教材叢書としての「書道入門書」作成にかかった。上記のような様々な事柄に触れていくと膨大な内容となってしまう。とりあえずは授業に即した実践本をめざし、周辺のことをあまり含まない本として完成させつつある。当然その内容以外に伝えたいことが多くあり、更にそれらを整理していきたい。

しかしこの「書道」という授業での目標は、あくまで前述のとおり以下の4点である。

1. 筆を使って墨書することに慣れ親しむ。
2. 日常の文字を正しく美しい形で書くことができるよう練習する。
3. 書道史を通して書体成立の変遷を学び、文字に対する理解・関心を高める。
4. 自らの書作品を創り、また鑑賞することを通して書道の芸術性を理解し、さらに、それを各自の言葉で話すことができるようになる。

あれも伝えたい、これも伝えたいと欲張れば、実作する時間が少なくなる。この「書道」の講座においては書くことの楽しさ、難しさを実感し、いいものを創りたいという意欲をもたせることが第一義であると考える。そのため毎回かなりの宿題を課し、学生たちはしっかりと期待に答えてくれている。

上記4つの目標を念頭におき、感動を覚える授業を展開してゆきたい。

(ふくみつ けいこ 本センター非常勤講師)